

2021年度個人研究費（特別支給）一覽

長 島 剛 子 NAGASHIMA Takeko 教授

研究課題 趣旨・目的	ドイツ歌曲におけるロマン主義の変貌 「ロマン派から20世紀へ」のシリーズ第3回となるこの演奏会では、J. ブラームス、H. プフィッツナー、A. シェーンベルク、A. ヴェーベルン、K. ヴァイルの5人の作曲家の歌曲を取り上げた。19世紀を席卷したロマン主義が20世紀に入りどのような形で継承され、乗り越えられていったのかをこれらの作曲家の歌曲を通して探ると同時にそれらの作品の魅力に迫った。
公表方法	演奏会「長島剛子・梅本実 リートデュオ・リサイタル ロマン派から20世紀へ Part Ⅲ - ロマン主義の変貌」
日程・会場 曲 目	2021年10月29日（金）東京文化会館小ホール J. ブラームス：〈スペインの歌〉Op.6-1、〈雨の歌〉WoO23、 〈きみが時折ほほえんでくれさえしたら〉Op.57-2、〈ひばりの囀り〉Op.70-2、 〈五月の歌〉Op.43-2、〈セレナーデ〉Op.106-1 H. プフィッツナー：〈まどろみはいよいよ浅く〉Op.2-6、〈捨てられた乙女〉Op.30-2、〈許しを求めて〉Op.29-1、〈だから春の空はそんなに青いの？〉Op.2-2、〈かつては〉Op.15-4 A. シェーンベルク：〈4つの歌曲〉Op.2 A. ヴェーベルン：〈『第7の環』による5つの歌曲 作品3〉 K. ヴァイル：〈マドロス・タンゴ〉〈ビルバオ・ソング〉〈光の中のベルリン〉
備 考	共演：梅本 実（ピアノ 本学教授）

本 島 阿佐子 MOTOJIMA Asako 教授

共同研究者	山内 のり子 YAMAUCHI Noriko 准教授
研究課題 趣旨・目的	コンピュータ多重録音による声楽表現の可能性と音楽による地方創生の試み～CD『音泉大国群馬』の制作～ コンピュータを用いて制作した楽曲を多重録音なども駆使しつつ、新たな声楽表現の可能性を探る。同時に、新型コロナウイルス感染拡大による経済的窮地におかれた温泉地に、地域と連携した音楽による創生を試みる。
公表方法 曲 目	CD「音泉大国」～温泉大国・群馬をめぐるサウンド・トリップ～ 群馬5大温泉にちなんだオリジナル曲、「故郷」等日本の名曲
出版日	2022年2月20日
出版社	(有)モノリス・フォンテーヌレコード
備 考	共演：富田芳正（作編曲、トランペット）、河上修（ベース）、吾妻光良（ギター）、渡辺康蔵（サクソ）、ステイーヴ・エトウ（パーカッション）、原田泳幸（ドラムス）

近藤 伸子 KONDO Nobuko 教授

研究課題	ベートーヴェンのピアノソナタ・ピアノトリオの研究 －初期と中期の比較を中心に－（2）
趣旨・目的	初期の大作第4番、形式面で革新性が目立つ中期の第13番、第14番を中心とし、ピアノトリオの傑作第5番《幽霊》を加えたプログラムとした。これまでの研究成果を踏まえ、初期と中期の作風をさらに掘り下げて比較研究する。同時期の交響曲、室内楽曲も参照し、ピアノの発展、社会的背景やベートーヴェンの生涯にも目を向け、各ソナタの独自性や新たな試みを、形式、和声、強弱法、ピアノ技法等多角的に考察し、演奏を通じて浮き彫りにする。
公表方法 日程・会場 曲目	演奏会「近藤伸子ピアノリサイタル Kondo Nobuko Plays Beethoven IV」 2021年11月8日（月） 東京文化会館 L. v. ベートーヴェン： ピアノソナタ第4番 Op.7 ピアノソナタ第9番 Op.14-1 ピアノソナタ第10番 Op.14-2 ピアノソナタ第13番 Op.27-1 ピアノソナタ第14番 Op.27-2《月光》 ピアノ三重奏曲第5番 Op.70-1《幽霊》
備考	共演：河野文昭（チェロ）、佐藤まどか（ヴァイオリン）

菊池 幸夫 KIKUCHI Yukio 教授

研究課題 趣旨・目的	邦楽管楽器を中心とした現代邦楽作品の新たな可能性 篠笛奏者金子弘美氏（本学非常勤講師）の依頼による篠笛と能管のための二重奏作品の創作を通して、邦楽管楽器の各種奏法について研究し、さらには、所属する作曲家同人団体の演奏会への出品に向けての邦楽管楽器作品の創作を通して、現代邦楽作品の新たな可能性についての探究を深めていくことを目的とする。
公表方法 日程・会場	①金子弘美篠笛リサイタル ②New Chamber Music 2021 vol.7 ①2021年6月6日（日）汐留ホール ②2021年6月28日（月）すみだトリフォニーホール小ホール
曲目	①菊池幸夫：風吟抄 ②菊池幸夫：松籟乱声
備考	演奏：①金子弘美（能管）、松尾慧（篠笛） ②金子弘美（篠笛）

井上郷子 INOUE Satoko 教授

研究課題 趣旨・目的	星谷丈生、黒田崇宏のピアノ作品における作曲様式の比較研究 星谷丈生（1979-）と黒田崇宏（1989-）は、現在、そして今後の現代日本の作曲界を担う作曲家である。星谷は、その作曲の過程で、必ず何か、安易でステロタイプな作曲をしないようにする切断の「道具」を持ち込み、黒田は、制限を加えながら自らの耳によって音楽を成立させようとする。今回の研究では、両者のピアノ作品を比較検討することによって彼らの作曲作業を読み解き、作曲様式を明らかにしていくことを目的とする。
公表方法 日程・会場 曲目	「井上郷子ピアノリサイタル#31～ 星谷丈生／黒田崇宏作品集」 2022年3月6日（日） 東京オペラシティ・リサイタルホール 星谷丈生作曲： Platycodon（2020） フィクションの創造～シム・ヒョジョンの追憶に～（2022）委嘱作品・初演 黒田崇宏作曲： von Grau umrahmte Stille（2021）委嘱作品・初演

横井 雅子 YOKOI Masako 教授

研究課題	19世紀ハンガリー音楽における地域性の醸成—「ハンガリー風」の確立とロマ音楽家の役割の考察（補遺）
趣旨・目的	<p>2019年度の個人研究費（特別支給）にて行った「19世紀ハンガリー音楽における地域性の醸成—「ハンガリー風」の確立とロマ音楽家の役割の考察」では、ロマの楽師たちがいわゆる「ハンガリー風」と呼ばれるタイプの音楽において、いかに地域性の醸成に寄与したのかを、彼らの音楽そのものから明らかにすることを目的とした。そもそも何をもって「ハンガリー風」と呼び、ロマがそこにどのように関わったのか、「ハンガリー風」のスタイルがいかに確立されていったのかを、初期名人による楽曲の楽譜（多くの場合、後世の人の記譜による）の変化の推移と現行の演奏との比較によって検討し、併せて楽器の選択（ツィンバロム、クラリネット）の経緯も確認することを目指した。2019年の調査で初めて取り組んだ音楽古書店での調査では初期名人の中古楽譜に精通した店員のサポートがあり、予想以上に幅広い楽譜の存在を知ることとなった。ただ、2019年9月調査時には日程に余裕がなく、古書店での中古楽譜を網羅的に検討する時間をとることができず、課題を積み残した形となった。また、ツィンバロムとクラリネットが選択されるようになった経緯についても、資料調査に予想以上の時間を必要としたため、次の機会を待つこととしてある。</p> <p>今回は、上記の未実施の古書店での調査、ジプシー楽団演奏家への聞き取り、ツィンバロムとクラリネットの使用に関する歴史的経緯の調査という、前回積み残した3つの課題を実施し、2019年度に設定した研究を完成させるのを目的としたが、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、実質的に渡航しての調査を実施できなかったため、半年間の延長を申し出て承認された。したがって、今年度内では成果は未達である。</p>
備考	上記理由により、成果の公表は実施していない。

早稲田 みな子 WASEDA Minako 教授

研究課題 趣旨・目的	<p>単著『アメリカ日系社会の音楽文化—越境者たちの百年史』の出版</p> <p>本書は、筆者の博士論文（2000年）を大幅に加筆・修正したもので、北米日系社会の音楽文化の形成と変遷をジャンル横断的に扱い、かつ理論的に分析する初めての書である。これまでもアメリカの日系人に関する研究は多方面から行われてきたが、その多くが日系人史の社会的・政治的側面に焦点をあてており、文化研究、ことに音楽研究については十分になされてきたとはいえない。本書は、こうした先行研究の欠落を補うべく、アメリカ日系社会の音楽文化史の全体像を、日系新聞を中心とする歴史資料の収集とインタビュー、及びその分析を通じて明らかにしようとするものである。本書はまた、アメリカの日系人を事例として、祖国を離れ移住・定住し、マイノリティとなった人々——いわゆるディアスポラの人々——の音楽文化の変遷と展開を理論的に分析し、その特徴を描き出すことも試みる。</p>
公表方法	本書の出版
出版日	2022年3月（予定）
出版社	共和国 editorial republica

瀬尾文子 SEO Fumiko 准教授

研究課題 趣旨・目的	<p>ドイツ語圏近代市民オラトリオの演奏実態の調査——宗教的内容の受容を軸に——</p> <p>18世紀のうちは教会音楽の範疇に捉えられていたオラトリオは、19世紀前半のドイツでは音楽祭を初めとする世俗的な文脈で演奏されることが主流となった。では、作品の宗教性は、そうした場ではいかに受けとめられていたのか。1837年マインツにおけるゲーテンベルク祭で初演された、活版印刷発明者（すなわち聖書普及の最大の功労者）を主題としたカール・レーヴェのオラトリオの受容の実態を、一事例として詳細に考察する。</p>
公表方法	<p>①論文「(仮題) 1837年マインツにおけるゲーテンベルク祭の政治的コノテーション」を、2022年度国立音楽大学研究紀要に投稿。</p> <p>②論文「(仮題) ぼかさされた英雄像—レーヴェ／ギーゼブレヒト《ゲーテンベルク》とナショナリズム」を2022年度中に雑誌『美学』に投稿。</p>

三 浦 雅 展 MIURA Masanobu 准教授

研究課題 趣旨・目的	「くにおん楽器音データベース」のための収録方法と格納方法に関する研究 多数の演奏音を収録し、音色研究や楽器音研究に利用可能なデータベースの構築を最終目標とする。そのためには、音響収録方法の検証と、記録された演奏音の格納方法が課題となる。音楽大学における音楽学研究の促進につなげるための録音技術と教育に用いることのできるデータベースの構築を目指し、そのための記録と格納に関する研究を実施する。
公表方法	論文発表を予定している。2022年度日本音響学会音響研究会資料、2022年度日本音楽知覚認知学会研究発表会資料、国際騒音会議（Internoise）研究発表会資料、または2022年度国立音楽大学研究紀要のいずれかにて発表する。

瀧 川 淳 TAKIKAWA Jun 准教授

研究課題 趣旨・目的	音楽家による音楽アウトリーチ活動が児童に与える教育効果に関する研究 —従来型音楽鑑賞教室と音楽アウトリーチ活動の比較分析を通して— 本研究は、近年さかんに実施されている音楽家による参加体験型の音楽アウトリーチ活動が児童の音楽的な学びにどのような教育効果をもたらすのかを明らかにすることを目的としている。研究の方法は次の通りである。音楽アウトリーチ活動と、同じ音楽家による従来型の音楽鑑賞教室を実施し、この2種類における児童の学びを比較検討する。
公表方法 掲載誌 出版日 日程・会場	研究論文 国立音楽大学『研究紀要』第57集 2023年3月（予定） 音楽アウトリーチ実践：熊本県津奈木町立津奈木小学校1～6年生（2021年12月1～3日） 音楽鑑賞教室：東京都江戸川区立篠崎小学校3～6年生（2022年1月28日）
備 考	研究協力：公益財団法人熊本県立劇場 熊本県津奈木町立津奈木小学校 東京都江戸川区立篠崎小学校 岡村彬子（メゾソプラノ） 池澤真子（ソプラノ） 虫明知彦（ピアノ：東京公演のみ）

八 幡 眞由美 YAHATA Mayumi 准教授

研究課題	幼年文学に関する研究 —幼年文学の重要性を中心に—
趣旨・目的	幼年文学は5歳頃から小学校低学年までを対象とした文学であり、絵本から童話への橋渡しとして重要な役割を持っている。しかし、絵本や児童文学に比べると、一般的に注目されることが少ない。また、定義や内容について曖昧な要素も多い。本研究では、幼年文学について先行研究や日本の幼年文学の歴史について整理するとともに、代表的な幼年文学作品について考察を行うことで、幼年文学の重要性を明らかにすることを目的とする。
公表方法	①学会での研究発表 ・日本保育学会第75回大会（ポスター発表） ・日本教師教育学会第32回大会（予定） ②論文投稿（総合人文科学研究第5号等、予定）

山 本 智 子 YAMAMOTO Tomoko 准教授

研究課題	病気・障がいのある子どもとの乳幼児期からの地域共生にかかわる教育支援に関する研究
趣旨・目的	障害児保育・教育にかかわる専門職の養成課程では、実践と関連付けて学習した知識の理解を支援することや、実践をふまえて障害児の保育や教育に関して探究することが課題とされることがある。本研究の目的は、障害児・保育にかかわる専門職教育に関して実践にかかわる専門職と学び考えることを支援することにある。
公表方法	出版
出版日	2022年2月
出版社	(株)北樹出版

末松 淑美 SUEMATSU Yoshimi 教授

研究課題	話法助動詞の対照言語学的研究 – 可能の助動詞を用いた要求表現と話者の意志
趣旨・目的	ドイツ語とオランダ語の意味論的対照研究という枠組みの中で、話法助動詞を主な研究対象としている。必然を表す話法助動詞 müssen と moeten を用いた要求表現の比較では、発話解釈において、話者の意志の反映のされ方に差異が確認された。似たような傾向が、可能の話法助動詞 können と kunnen を用いた要求表現にも見られる。翻訳比較によりさらに十分な対照例文を集め、実証的な研究を通して、können と kunnen を用いた要求表現の解釈に、müssen と moeten に見られた差異との共通性の有無を確認すること、そしてそれを明示的に記述することを目的とする。
公表方法	研究論文
掲載誌	国立音楽大学研究紀要第57集
出版日	2023年3月（予定）

大和久 吏恵 OWAKU Rie 准教授

研究課題	音大生を対象とした英語オンライン授業時における疲労軽減コンテンツの開発 – 「ヨガで英語学習」の動画視聴に関する調査 –
趣旨・目的	本研究の目的は CLIL（内容言語統合型学習）に基づき音大生を対象としたオンライン授業時における疲労を軽減させるコンテンツを開発することである。具体的にはヨガの指示を英語で行う動画を配信し、音大生にとって英語学習と軽微な運動による疲労の軽減が同時にできるコンテンツの提供を目指す。事前事後調査の結果を鑑みて、翌年の学生へより効果のあるコンテンツが提供できるよう改善していく予定である。
公表方法	国立音楽大学研究紀要第57集
出版日	2023年3月（予定）